

バルザック著 水野亮訳「知られざる傑作」岩波文庫、岩波書店 1928年11月25日刊を読む

## 芸術の使命

「芸術の使命は自然を模写することではない、自然を表現することだ。君はいやしい筆耕ではない、詩人なんだ。」と、老人は頭ごなしポルピュスをさえぎって、強く叫んだ。「さもなければ彫刻家は、女をそのまま鋳型にとれば、ほかになんにも仕事はいらんわけじゃないか。ところでね、ためしに君の愛人の手を鋳型にとって、目のまえにおいてみたまえ。まるで似もつかない恐ろしい死骸に出くわすだけだろう。そうして君は、彫刻家ののみを求めにいかずにはいられなくなるだろう。彫刻家はその手を正確に写しとることはしないが、その動きと生命を君に彫り上げてみせるだろう。われわれは事物の精神を、魂を、特徴をつかまえずにはならない。効果、効果というが、そんなものは生命に付随する偶然で、なにも生命そのものじゃない。手は、——わしはいまこれを例にしたからいうのだが、——手は、ただ漫然と胴体についてるだけじゃなくて、ある考えを現わしている、保ちつづける。そこをつかんで描き現わさなくてはならないんだ。画家にしろ、詩人にしろ、彫刻家にしろ、原因と結果を引きはなしてはならない。この二つはからみ合っていて、はなそうとしたってはなれるものじゃないんだ。そこにこそ、ほんとの戦いがある。多くの画家は、芸術のこのテーマを知らずに、本能的に凱歌をあげてる。君は女のデッサンをする。だが、女を見ちゃいないね。自然の秘法を無理にも手に入れるところまで行くには、そんなことではだめさ。君にはそんな気がなくても、君の手は、師匠のところまで写しとったお手本をそっくりまた写してる。君はものの形の奥底までおりていかない。形がまがりくねったりにげまわったりするのを、追求するだけの愛と忍耐がない。美はきびしくて、なびきにくいものなのだ。そんなことでみすみす追いつかれるような、なまやさしいものじゃない。美をむりやり降参させるには、美がくつろぐときを待ち、つけねらい、おしつけ、そうしてしっかり抱きすくめなくてはならないのだ。形は、神話のプロテウスよりずっととらえにくくて、隠れ家もよけいに持つてるプロテウスだ。長い格闘のあとでやっとのこと、不本意ながらもほんとうの姿を見せてくれる。君たちときたら、形が君たちにまかせる最初の、——それともせいぜい二度目か三度目の、上っつらの姿だけで満足してしまう。勝利にかがやく闘士はそんなふうにはしないで。かつて負けたためしのない画家たちは、うっかり抜け道なんかにだまされはしない。彼らは、自然がまっ裸になってその真髄を示すのやむなきにいたるまで、根気よく持ちこたえていく。ラファエロのやり口がそれだった。」と、老人は、かの美術の王にたいする尊敬を現わすために、黒びろうどの帽子をぬいだ。——「彼の人のみすぐれた偉大さは、内的感覚からきている。しかもその内的感覚は彼の場合、形を打ちこわそうとするかのごとくにさえ見える。彼の描いた人物において、形は、われわれ人間の場合と同じく、思想感情、ある広大な詩情を伝達し合うための手段だ。彼の描いた人物は、それぞれ一つの世界だ。それぞれ一つの肖像だ。そのモデルは、ある崇高なまぼろしのなかで、光りかがやいて彼の目のまえに現われたのだ。内心の声がそのモデルを名指し、神の手がその覆いを取り去って、モデルの過去の一生中に表現の種々のよりどころの存することを指さして教えたのだ。君たちは、君たちの描く女に美しい肉体、美しく波打つ髪の毛を描いてやる。だが、静けさなり情熱なりを生み出し、特殊な効果をひきおこす血はどこにある。君の聖女はもともと栗色の髪の毛の女だ。ところで、この

絵じゃ、ポルピュス君、ブロンドの女になってるじゃないか。だからいうのだよ、君たちの描く人物ときたら、色を塗った影の薄い幽霊で、そいつを君たちはわれわれの目のまえにさまよわせてみせるのさ。しかも君たちはそれを絵と呼び、芸術と称するのだ。つくりあげたものが、家のかっこうよりはまだしも女のかっこうに似ているという、ただそれだけの理由で、君たちは目的を達したと思いこんでしまう。そして、君たちの絵のわきへ、もはや駆け出しの画家のように、*currus venustus*(優雅な車)とか *pulcher homo*(美しき人)とか書き入れるには及ばないというので、鼻高々と、おれはじつにすばらしい芸術家だ、などとうぬぼれるのさ。いやはや、君たちはまだまだだよ。そこまでいくには、クレヨンもうんと使いへらし、カンヴァスも思うさま塗りつぶさなくてはなるまいて。そうだ、たしかに女というものは首をこんなかっこうにかしげることもある。スカートをこんなふうにして持つこともある。目に張りがなくなって、全体のやさしいあきらめの色ととけ合うこともある。睫毛のこまかくふるえる陰も、そんなふう<sup>に</sup>に頬にうつてることもある。まったくそのとおりだよ。それでいい。しかも、それではだめなのだ。何が欠けているのか。なんでもないものが欠けている。が、このなんでもないものがじつはすべてだ。君たちは生命の外観だけはとらえる。けれど、あふれ出る生命の過剰を現わしはしない。たぶんは魂であって、肉体という外皮のうえに雲のようにただよってる、なんともわからないもの、—— 一口でいえば、チチアノとラファエロがつかまえた生命のあの花、それを君たちは現わしていないのだ。君たちが到達した極点から出発すれば、すてきな絵ができるだろう。だが君たちは、あまりに早く<sup>あ</sup>厭きすぎる。俗人は喝采するだろう。しかしほんとうに目のきく人は、笑うばかりだ。」

P150 ~ 153

[ コメント ]

バルザックの90篇からなる「人間喜劇」の中の短編「知られざる傑作」の作品中に示された「芸術論」。夏休みの終わりに読むのは、このような古典に限ると実感する。

- 2009年8月30日林明夫記 -